

令和6年度「学校評価シート」														大田市立久屋小学校	
【学校教育目標】		「心豊かで かしく、たくましい子どもの育成」													
【学校教育重点目標】		「気づき 考え みんなで創り出す ～子ども主体の学びの文化・くらしの文化の創造～」													
【めざす学校像・教師像】		「安心して学べる学校」「信頼される学校」「よさが発揮できる学校」・「笑顔で協働できる教職員」「信頼関係を築き、温かい人間関係を育む教職員」「学び続ける教職員・積極的な研修参加」「自立した教職員」													
評 価 計 画															
中期経営目標	短期経営目標	達成のための方策	評価指標	目標値 %	職員 %	児童 %	保護者 %	評価	自己評価		学校関係者評価 (学校運営協議会) コメント	改善策			
									結果と課題の説明						
									《評価》 A(十分達成した) B(おおむねできたが今後も改善が必要) C(改善が必要)	○成果 △課題					
(気づき) 自分で問いを立てる力の育成	学ぶための素材や方法を見つける	①・児童の多様な「気づき」を引き出すしかけの工夫（単元や学習課題、めあて、ゴールとの合わせ方）、ゴールを自分で考える。めあては具体的にものせる。 ・身近なことや話題性のあることを取り上げながら学びへの価値づけをしていく。児童の生活とつなげた学習課題を設定したり、解決したいと思える導入にしたりしていく。 ・既習事項との関連をもたせたり、環境を整えたりして、学びの方向性をもたせる。 ・予定表を確認し、自分で課題の準備や片付けをするなど、見通しをもって取り組めるようにする。 ・視覚支援を通して興味関心を高め、課題がとらえられるようにする。 ・キャリアパスポート「つけたい力」の中に「聞く態度」を入れ、気づきを促す取組とする。	「やってみたい。調べたい。こうしたい。こうやればできそうだな」などの思いをもって学習した」	90	91	92	88	A	○導入で、これから始まる学習と自分たちの生活の関わりをつなげることで児童の「やってみたい」という気持ちにつながった。 ○児童の興味をもったことから学習をスタートさせると学習意欲が高まった。 ○授業のはじめに本時のめあてを板書したり、教師が意識して授業を進めたりすることができた。 ○デジタル教科書やまなびポケットの使用頻度が増え、学習内容の理解が進み、興味関心をもって授業に向かえる児童が増えた。 ○ICTの活用が増えたことで、学びに対する意欲が高まった。 △学習の予定表を示すことがあまりできなかった。 △ICT活用の個人差がある。 △めあてが教師からの一方的な提示になってしまい、児童が意識をもって学習できているかが不明瞭である。 △担任によってはICTスキルがまちまちである。		・学校評価の基になるアンケートの回答については、低学年と高学年では差があると思われるので、各学年ごとに変化を分析する方法を検討しても良いと感じている。また、アンケートの発問の仕方を学年に応じて変えるのも良いかもしれない。	・ICTスキルの定期的な研修を位置づけ、研鑽を行う。 ・教員同士が授業を見合える環境づくりをする。			
	自分たちの暮らしをよりよくするための課題や手立てを見つける	②・学級・学校生活や自分の生き方にかかわる「気づき」の工夫（お知らせコーナー・帰りの会で振り返り・5、6年生や委員会からの提案・教師の価値づけからの新たな「気づき」・なりたい自分になるための作戦など）、なりたい自分になるための具体的な取組を進める（宿泊体験など、具体的場面の中で考え、取組につなげる。）。 ・できたこと、やろうとしたことに価値を付け、次への意欲を高める。 ・大きな行事で、どんな自分になりたいか、めあてをはっきりとたせる。 ・帰りの会だけでなく、授業中や給食中でも児童のよさや頑張りに気づき合えるようにする。 ・帰りの会の中に、「一日を通して気づいたこと」を取り入れる。	「学級や学校、自分のくらしをよりよくするための問題に気づくことができた」	80	55	78	65	C	○児童総会で学校の問題点を5・6年生が全体に発表することができた。 ○運動会や発表会の期間はふりかえりの時間を設けることができた。 ○毎日帰りの会で日々の振り返りをする時間を設け、よかったことや楽しかったことを発表する児童が多くなった。 △帰りの会の時間が確保できず、気づいたことを話す時間が作れなかった。 △その場で聞くことと意見が出ないので、児童総会前に各学級で学校について考える準備があると良い。 △学活で学級で困ったことを話す時間が作れなかったため、問題に気づくことができなかった。 △学級や学校の課題に気づける児童は少ない。みんなのことを思うことより、自分のことを中心に考えている傾向がある。 △委員会の当番活動に責任をもって取り組んでいるかどうかについて個人差がある。 △生活目標など全校で共有する部分が弱かった。 △帰りの会で「1日を通して気づいたこと」に取り組んだが、意見を言う児童が少なかった。	・児童会が中心となって全校で取り組むメディア接触の約束やその他の約束に取り組むのも効果的と思われる。	・生活目標等の全校で守ること、大切にすることを意識化させる。 ・高学年が考える生活目標(学習と生活について)を学期に一つ設定し、全校で取り組み、学期終わりに振り返りもする。 ・児童総会前に高学年が各学級に総会で話す内容を伝え、各学級が総会で話せるような準備をする。				
		自分の課題を自分の方法で追究する	③・既習事項との関連性など、根拠を明確に、自分の考えをもたせる。 ・「自分の考えを書きさる。伝えさる。」経験を積む。 ・図や絵、選択肢を活用したり、援助依頼の意識、態度を育成したりするなどの支援を通して、主体的な表現と思考を促す。 ・ペアやグループを取り入れたり、ポイントを明確にしたりしていくことで、思考の焦点化と深化を図っていく。 ・経験をを通して課題に取り組めるようにする。また、カードだけでなく、言葉で援助できるようにする。 ・教科書から見つけるのではなく、教科書から見出せる思考を大事にする。 ・自分の考えをノートに図や絵なども使いながら、書く活動を広げていく。 ・自力解決、交流学級での活動を見守る。 ・思考が深まる「問い返し」をやってみる。	「自分なりの方法や考え方で学び、最後まで伝えきり、やりきることができた」	90	73	86	92	B	○学年や個人にもよるが少人数ながら、自分の考えを教え合ったり伝え合ったりする意識は高いと思う。 ○タブレットを持ち帰ることが多くなったように感じる。そのため、自分なりの方法や考え方の選択肢が増え、保護者の数値があがったのではないと思われる。 △「書く」ことに抵抗がある児童が多く、自分の考えを詳細に文章に表す力が弱い。 △少人数なのでペアやグループよりも一斉の話し合いになりがちである。個人の考えを大切にするために、ペアや小グループも活用していきたい。 △学習意欲に個人差がある。 △教師と子どもの関係だけで自分の考えを友達と伝え合う時間が作れなかった。	・児童がタブレットをしっかりと使いこなしており、パワーポイントでの資料を作り、発表する姿は素晴らしかった。 ・家庭に帰ってから外遊びをする児童が減ってきていると思われるので、ICTとの付き合い方、兼ね合いにも配慮をしていく必要がある。また、読書量とICTとの関係性も深いため、両者のバランスを考えていくことも必要になる。	・話し合いの仕方やペア、グループ活動の有効性を教職員で学び、実践する。			
(考え) 調べ、表現し解決のために行動する力の育成	学級・学校生活をよりよくするための意識を高める	④・学級活動や児童会活動などの中で、話し合う場と時間を定期的にもつ。 ・教師主導ではなく、児童の自己決定を大事にしたくらしを創る。 ・振り返りを通して、うまくいかないことから次を考える学びを大事にする。作戦を練り直す。 ・声かけを通して活動や気持ちの切り替えを促す。一見守るようにする。 ・一人一人が大切にされる学級づくりに向け、話し方や言葉遣いなどを毎日振り返り、自己を見つめ直す。 ・「もっとなかなくなる」「もっと楽しくなる」など、テーマをもった係活動に取り組む。 ・具体的場面から、対応の仕方や適切な方法を考えるなどの取組を大事にする。 ・形ではなく、根拠を考える話し合い活動を大事にしたい。	「学級・学校の問題を解決する方法を考え、改善に向けた取組をしていた」	80	64	73	71	B	○児童の言葉づかいや態度、人間関係のトラブルについて生徒指導、管理職を中心に即時対応できていた。年度の後半は大きなトラブルが減り、校内に穏やかな雰囲気広がった。 △友達への呼び捨てや、廊下歩行、体育館の使い方など気になることもまだあるので、全校で課題を意識する必要がある。 △自分たちの生活の中でめあてが明確でないため、振り返りも十分にできなかったのではないが。 △学級での係活動が定期的に行えなかった。		・全校で守ること、大切にすることを意識化させる。（生活目標等） ・高学年が考える生活目標(学習と生活について)を学期に一つ設定し、全校で取り組み、学期終わりに振り返りもする。 ・児童総会前に高学年が各学級に総会で話す内容を伝え、各学級が総会で話せるような準備をする。				
	協働的な学びの成果を実感し、次の学びにつなげる	⑤・互いの考えを交流させ、学びの広がり保障する。そして、その取組を価値づける。 ・振り返りを大事にし、取組の成果・自分の成長を実感させる。 ・事前活動を工夫し、みんなで創ることに安心感をもたせる。 ・電子黒板などの有効活用を通して、みんなでつながる学びを活性化させる。 ・みんなでまとめ、振り返るために、タイムマネジメントをていねいにする。 ・つながる学びの様子を可視化して、意識づけを図る。 ・学習を児童の生活と結びつけ、くらしを創ることにつなげる。 ・児童みんなの思いからめあてを創る。	「友だちとともに学びを深めることができた」	90	82	90	92	A	○電子黒板を使って、友達の考えや作品を一斉に見合うことができた。 ○高学年を中心に調べたこと、学びをICTを活用しながら広げていた。全校にも広げていきたい。 ○電子黒板で学習場面や個々の学びを全員で見ることができ、学びを共有できた。 △自分の言葉や文章で伝えることと、ICT活用の両立ができるようにする。ICTをどの子も同様に使用できるようになるための時間が必要になる。	・②、④、⑥の評価項目の職員評価はかなり低い数値を示しているが、その数値ほど実際はできていないのではないかと感じる。	・ICT活用の研修、研鑽を行う。 ・高学年が1年生にタブレットの操作方を教える活動を継続して行う。 ・朝活動の工夫をする。 ・友達とともに学びを深めるために、学習で作った成果物を見合う機会を増やす。				
(みんなで創り出す) 人とつながり、協働しながら解決・創造していく意欲・態度の育成	合意形成を図りながらよりよい学級・学校生活を創る	⑥・学級スローガンの振り返りを大事にして、成果、成長、課題を共有できる場を設け、次の活動につなげる。 ・係活動や生活目標、運動会や各種行事に向けた取組を自治的に進め、その成果や課題を全員で共有し、まとまりを強める。 ・ほかほか言葉など、よいことでみんなでつながり合う場を工夫する。その都度、価値をつけたら、言葉によるよいかわりを意識させたりしていく。 ・みんなで「間違えから学ぶ」ような評価と指導を心がける（継続）。 ・交流学級のみんなとつながり合える場をしかける。 ・休み時間を利用して、みんなでともに過ごす場を意図的にしかけていく。 ・児童の判断やかかわりの面でうまくいったことを確認していく。	「学級や学校の問題を友達と一緒に解決し、その取組の成果を実感していた」	80	45	67	76	C	○全員で頑張ったことを星のカードに書き、可視化して成果を実感できるようにした。 ○係や当番活動など自治的な活動は、学級の実態に合わせて行うことができた。 △休み時間に学級全体で遊ぶことが少なかった。 △間違いを消して正解だけを残す児童が多かった。 △課題解決に向かうための自治的活動はやや弱い。 △昨年と比べ、トラブルは減っているが、児童と保護者のとらえはそうではないのかもしれない。 ②④⑥の項目は関連しているのではないと思われる。 △⑤の項目では保護者の数値が上がっているが、本項目では減っている。		・学級目標、毎月のめあてなど、課題を意識した具体目標を設定する。				
	いじめ防止に向けた取り組みの充実	⑦授業づくりと学級づくりの充実により、よりよい人間関係を築く。	「友達といっしょに楽しく仲良く勉強したり、学級を創ったりして、仲間をつくることができた」	90	91	92	86	A	○児童が困ったことや嫌なことをすぐに伝えてきたので、トラブルにすばやく対応することができた。 ○教員どうしてトラブルを共有することで、解決に向かいやすかった。 ○人間関係作り課題のある児童もいるが、担任を中心として個別指導と全体指導を使い分け、児童のよりよい関係作りを努めた。 ○家庭では学校生活での不満を漏らしているかもしれないが、学校に来れば学校を楽しんでいる児童が多いのではないが。		・ロング休みを活用し、学級遊び、係活動等を実施する。 ・SCを活用する。 ・トラブルがあったときには、その日のことはその日のうちに解決して、翌日から気持ちよく登校できるようにすることを継続する。				
学びの素地とした読書の充実		⑧図書館だよりや授業公開日などを利用しながら、家庭への啓発の工夫を図り、家庭と連携した読書習慣づくりを進める。	「読書にかかわる学校評価の数値が昨年度と比べ上がっている」	昨年度よりアップ	91	86	51	A	○朝や昼休みの図書館への来館者が増えた。 ○図書担当、司書教諭を中心に、本の紹介や掲示物、コーナーの設置が定期的に行われ、図書室に向かう児童が増えている。 ○モットソッカを活用することでより興味を持って読書に取り組めた。 △タブレットを使う機会が増えたことで読書の時間が減ることもあった。		・国語の授業等で本に触れ合う時間を設定する。 ・読み語りボランティアを継続する。ただし、次年度は有料のため検討が必要になる。 ・家で読書することをよびかける活動をする。 ・学級での読書活動への取り組みを増やす。				
授業の質の向上とワークライフバランスを確立するための業務改善		⑨重点目標を視点とした業務の見直しと改善	「授業・学級経営に取り組みやすい」と実感できている教職員の割合が9割以上	90	100			A	○行事ごとに反省・改善をすることで、次年度により良い形でつなげることができている。 △学年や学級、分掌による仕事量の差が大きいため、なるべく全員で仕事を分散できるようにしたい。 △各行事や活動の見直しを継続する。 △更なる業務改善を進める。		・授業時間を見直し、行事の内容と準備、練習のための時数の精選をする。 ・下校時刻をさらに早める。 ・複式学級の空き時間を1日1時間は確実に確保する。 ・学期末事務に取り組み時期と学期末の短縮授業の時期を合わせる。 ・学期末の授業時間の見直しを行う。				